

英 語

乗 富 智 子

1 英語における「考える子」

本校英語の目標は「コミュニケーション活動を通して英語への関心を高め、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力を培う」である。これは、簡単な英語を使いながらコミュニケーションを図る楽しさや意義、人とかかわる大切さを感じることをねらうものである。英語学習の入門期にあたる学年については、たくさんの英語に触れることを重視し、英語表現への気付きを高める。

母語でない言語でやりとりをするとき、子どもは「何を言っているのか」「どう言えばいいのか」といった「問い」をもつ。その「問い」を解決したいと思うとき、子どもは考える。さらに「なんとかして伝えたい」「どう言えばいいか知りたい」「わかるようになりたい」といった「こだわり」をもつとき、子どもはより深く考える。つまり、英語では「言いたい、伝えたい、でもどう言えばいいのかわからない」と思うときに子どもは考えるのである。考えることで、子どもは豊かな英語表現に気付き、他者や異文化を理解する。他者や異文化を理解することは、自己理解につながるものである。

英語では、次の三つを「考える」と定義する。

- ・英語でのやりとりを通して、他者や異文化について理解しようとする。
- ・今までに触れたことのない英語表現の意味を推測しようとする。
- ・伝えたいことが伝わるように、適切な英語表現を選択して表現しようとする。

これらのことから、英語における「考える子」を以下のようにとらえる。

内容を重視したコミュニケーションをくり返す中で 新たな英語表現に気付いたり 選択・活用したりしながら 他者や異文化に対しての思いを深め広げていく子

2 学ぶ楽しさを味わう英語の授業

学ぶ楽しさを味わうためには、「言いたい、伝えたい、でもどう言えばいいのかわからない」という英語への「問い」や「こだわり」をもつことが必要である。「問い」や「こだわり」をもって英語を学ぶことは、子どもにとって必要感のある学びとなる。「問い」や「こだわり」をもって学ぶとき、子どもが感じる楽しさには次の三つがある。

- ① 伝えたいことを伝えるために必要な英語表現を知り、使えるようになる楽しさ
子どもは、様々な表現に触れ、伝えたいことを伝えるために必要な単語やフレーズなどの英語表現に気付く。そして、その英語表現を活用しようとする。英語を使う経験をすることで、使える楽しさを味わうことができる。
- ② 互いに伝え合う中で、他者への理解を深める楽しさ
教師や友達とのコミュニケーションを通して、子どもは、相手が伝えたいことを理解する。そうすることで、今まで知らなかった意外な一面や自分との共通点・相違点に気付く楽しさを味わうことができる。
- ③ 英語表現や内容が「分かるようになった」「言えるようになった」ことを自覚する楽しさ
「問い」や「こだわり」をもって友達とやりとりをした結果、子どもは「分かるようになった」「伝えることができるようになった」と実感する。学ぶことにより自分の成長に気付く楽しさを味わう。

3 「学ぶ楽しさを味わう授業」への手だて

(1) 伝え合う必要感のある内容や場面

子どもが英語での自然なコミュニケーションを楽しむためには、子どもの興味・関心を高め、やりとりする必要感のある内容や場面を設定することが重要である。子どもにとって必要感のある内容や場面を設定することで、子どもは生活経験、知識、既習表現などを活用し、理解したり表現したりすることができるようになる。

そのために、目的意識や相手意識を生み、内容や場面に必要感があるタスク活動を取り入れ、学習の見通しをもった単元構成を工夫する。やりとりする内容を自己表現につながるものや異文化に関するものを中心にするすることで、子どもが内容に興味をもち、「知りたい」「言いたい」といった思いをもつことができるようにする。

(2) 他者理解・異文化理解につながるコミュニケーション

英語では、自己表現の場面が多いことから、コミュニケーションをくり返す中で他者理解を深めることができる。ペアやグループでの活動は、たくさんの相手と話すことができ、他者理解を深めるきっかけとなりうる。また、英語という言語の特性から、コミュニケーションを通して異文化への理解につなげることができる。

他者理解・異文化理解を深めるために、ペアやグループなど、コミュニケーションを行うときの形態を工夫する。意図的にペアやグループを組むことで、特定の相手だけではなく、たくさんの相手と話することができるようにする。また、他者理解・異文化理解につながるトピックを扱うことで、活動を通して自分と他者との共通点や相違点、意外な一面などを知ることができるようにする。さらに、よりくわしく相手を知るための質問や、共感を表す言葉を例示することで、他者理解が深まるようにする。互いの共通点や相違点、意外な一面を理解し合うことで、学ぶことが楽しいと感じることができる。

(3) 自分の世界を広げるふりかえり

子どもが自分の学びをふり返り、「言いたいことが伝わった」「相手の言っていることがわかるようになった」という思いを明確にすることで、学ぶ楽しさを味わうことができる。さらに、他者や異文化に対する認識がこれまで以上に広がることを感じることで、自分の成長に気付くことができる。

毎時間の授業で、自分の学びや他者からの学びをふり返り、ワークシートに記入する時間を設定する。ワークシートには、ねらいに達することができたかを自己評価する部分と、自由記述の部分設ける。自己評価の部分は、主に英語表現について問い、英語が理解できたか、伝えたいことを表現できたかをふり返る。自由記述の部分では、気付いたことや考えたこと、感想などを書く。自由記述の部分設けることで、子どもは自分の変容や成長に気付くことができる。言いたかったことが伝えられたことや、伝えるために必要な表現を知ったこと、相手についてよりくわしく理解したことなどを自ら認識することで、子どもは自分の変容や成長を感じる。一方、難しいことやできなかったことにも気付くことで、子どもは自分の課題を認識し、次の学習への意欲を高め、もっと表現したいという思いを強めることができる。

(1) 伝え合う必要感のある学習内容や場面

6年生「ワールドレストランへようこそ! What would you like?」の実践から

本単元は、世界中の様々な料理に触れながら、自分の好きな食べ物を言ったり相手の好きな食べ物を聞いたりする学習である。伝え合う必要感を生む手だてとして「ジム先生(A L T)におすすめのメニューを考える」という場面を設定した。これまでは自分の好きな食べ物を話すことを中心に学習をしたが、本時では相手の食べ物の好みを知るために様々な質問をしなければならない。「ジム先生に」という相手意識と、「おすすめのメニューを考えるために」質問するという目的意識を明確にもたせることのできるタスク活動である。子どもは「ジム先生に好きかどうか聞かないと。」とつぶやき、「バランスとか色合いとかも考えたい。」「健康なメニューがいいか。」など、課題に対してどのように取り組むとよいかを発言していた。

本時は「ジム先生におすすめのメニューを考えよう」という課題を出した上で teacher talk を行った。ここではハンバーガーショップのメニューを提示し「Which do you like, ~ or ~?」という質問の文を指導した。これは子どもがA L Tに質問するとき「～と～のどちらが好きか。」とたずねる表現をよく使うと予想されたためである。そして、デモンストレーションでは「Do you like ~?」や「Are you ~?」など、既習表現の文を聞かせ、質問しながらメニューを考えるというモデルを示した。「ジム先生に質問をしたい」という子どもの必要感があつたため、子どもは teacher talk やデモンストレーションから質問の仕方やその答え方を聞き取ろうとしていた。

グループでおすすめのメニューを考える場面では、デモンストレーションで示した表現を基本としながら、子どもはA L Tに質問していた(資料1)。以下は1班の子どもの質問の様子である。

A児：ジム先生、いつもコーヒーを飲んでいるよ。

B児：コーヒー好きか聞いてみよう。

A児：Which do you like, coffee or yoghurt?

Jim：I like yoghurt.

全員：お～！！

C児：What kind of yoghurt?

Jim：Fruit.

C児：Fruits! Mix!



資料1 A L Tに質問する様子

前時の授業でA L Tが「I like coffee. I drink every day.」と言っていたことから、「ジム先生はコーヒーが好き」と1班の子どもは予想した。そして自分たちの予想を確かめたいという思いから、「Which do you like, coffee or yoghurt?」という質問を考えた。この「Which」を使った質問文は、teacher talk やデモンストレーションでくり返し子どもが聞いた表現であったため、使うことができたのだと考えられる。A L Tの「coffee」という答えを期待していた子どもにとって、A L Tの「yoghurt」は予想外の答えであり、とても驚いていた。さらにその後C児が「What kind of yoghurt?」という質問をしたことから、よりくわしく知りたいという思いが1班の子どもの中に生まれたのだと考えられる。おすすめのメニューを考えるためには、「どんな種類のヨーグルトが好きか」と質問する必要があつた。このように必要感のある場面を設定することで、子どもは学ぶ楽しさを味わうことができる。「ジム先生におすすめのメニューを考える」というタスク活動により、子どもは「コーヒーが好きか確かめたい」「どんなヨーグルトが好きか知りたい」という思いをもつことができた。子どもが「聞きたい」「知りたい」と思って英語を話すことは、内容を重視したコミュニケーションとなる。タスク活動により、子どもは伝え合う必要感をもってA L Tと話すことができた。

一方、本時では全員が質問できたわけではなく、他の友達のやりとりを聞いているだけの子どももいた。2班のD児は、グループで質問するとき自分で質問することができず、グループの友達が質問するのを聞いていた。しかし、D児のふりかえりを見ると、「ジム先生に英語で質問することができましたか。」の問いには

資料2 D児のふりかえり

「Yes」と答えている(資料2)。さらに、自由記述には「ジム先生がビールが好きといていたのでオリジナルメニューをビールにした。魚が好きなのが分かった。」とある。これらのふりかえりから、グループの友達と一緒に質問を考えたことが、D児にとっての「質問できた」という自己評価になったこと、ALTの話したことは聞いて理解できたことが分かる。D児はグループの友達とALTとのやりとりを「知りたい」という必要感をもって聞いていた。英語のコミュニケーションというと話すことに重点を置いた活動が多いように思われるが、聞くことも大切な要素である。特に、小学生の発達段階を考慮すると、聞くことは話すこと以上に大切な場合がある。たとえ十分に話すことはできなくても、「知りたい」という思いをもって聞き、内容を理解できたことは、学ぶ楽しさであると考えられる。このように、相手意識や目的意識を生むタスク活動を行うことによって、話すことだけでなく聞くことにおいても学ぶ楽しさを味わうことができる。

(2) 他者理解・異文化理解につながるコミュニケーション

6年生「自己紹介をしよう」の実践から

「自己紹介ビンゴ!」という活動で、友達の趣味を予想してビンゴシートに書き、実際に友達にインタビューをした。6年生ともなると友達の習い事や好きなことはおおよそ分かっている。そこで趣味を聞くだけでなく、その趣味に関連した簡単な質問を一文付け加えてインタビューすることとした。英語で友達に質問できることは範囲が限られている。そのため、簡単な文章で質問することによって、これまで知らなかった一面や自分との共通点、相違点に気付き、他者理解を深めることができる。子どもはスポーツ選手やチームの名前、ゲームの種類など思い思いの質問を考え、インタビューすることができた(資料3)。

資料3 自己紹介ビンゴ!

E児は友達のF児について、お互いテニスを習っていることを知っていたためビンゴシートに「テニス」と書き込んでいた。そこで、F児に興味をたずねたところ、予想通り「テニスが好き」という答えが返ってきた。さらにE児はF児に「Do you like Nishikori?」と質問した。これらのやりとりから、E児は「テニスが好きなF君に錦織圭が好きかと聞いたらそうだと言っていた。ほくも錦織が好きです。」とふり返っている(資料4)。

資料4 他者理解を深めたふりかえり

このふりかえりから、E児は、友達のF児から、自分との共通点を見つけることができたのだとわかる。このように、よく知っている友達をさらにわかろうとすることで、他者理解は深まっていく。この実践から、英語だからこそ深められる他者理解があるのだとわかった。

6年生「ワールドレストランへようこそ！ What would you like?」の実践から

「ジム先生におすすめのメニューを考える」授業では、ALTと子どもがやりとりすることで、様々な英語表現に気付くことができるようにした。2班の「Which do you like, Japanese or American?」という質問に対し、ALTからは「Both.」という答えが返ってきた。「Both.」という表現は子どもにとっては未習の言葉だが、文脈から「どちらも」という意味を理解していた。また、授業の最後に、メニューについてALTから3班の児童へいくつかの質問をした(資料5)。

Jim : It's fruit salad. What kind of fruit? Apples, grapes . . . ?
G児 : うーん。何にする? (グループで話し合う)
H児 : Apple, pineapple, and lemon.
Jim : Oh, lemon! It's sour.

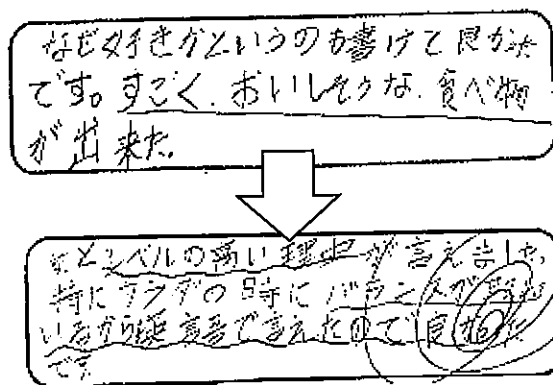
資料5 ALTからの質問に答える

ここでのやりとりは、事前に考えられ、用意された文ではない。その場でALTから発せられた英語であり、それに子どもは悩みながらも的確に答えることができた。「What kind of fruits?」の質問は聞き取れなくても、「Apples, grapes」という果物の単語を聞き取り、H児は「Apple, pineapple, and lemon.」と自分たちのメニューにある果物を答えている。そして、ALTの言う「sour」という単語に出合っている。「sour」という英語表現は子どもにとって耳慣れない言葉であり、3班の子どもはこの言葉には全く反応をしていない。しかし、ここは「sour」という英語表現に出合わせる大きなチャンスであった。知らない言葉でも、英語の意味や音を子どもの耳に残すことは大変重要である。

また、これらの英語表現に気付くことは、他者理解を深めることにもつながる。前述の2班にいたI児はふりかえりで、「先生は和と洋がミックスのメニューが好きだった。」と書いている。このことから、I児はALTとのコミュニケーションを通して、「ALTは和食も洋食も好き」という食べ物の好みを理解することができた。「both」という英語表現に気付いたことで、この他者理解が深まったのだと考えられる。同じように、「sour」の表現に気付くと、さらにALTに対する子どもの他者理解が深まったと考えられる。このように子どもがまだ知らない英語に出合ったとき、教師がそれに敏感に反応し英語表現に気付かせることが重要である。新たな英語表現への気付きにより、他者理解はさらに深まっていくのだとわかった。

(3) 自分の世界を広げるふりかえり

6年生「ワールドレストランへようこそ！ What would you like?」の実践から



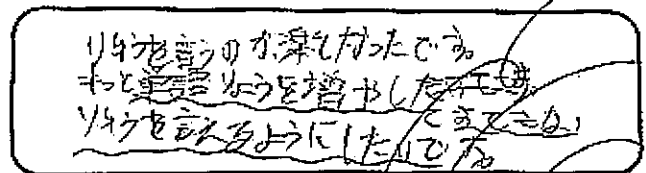
資料6 J児のワークシートの変化

自分の食べたいメニューを考え、それを友達に伝え合う活動を行った(第2, 3時)。それぞれの料理を選んだ理由をワークシートに書くようにした。第2時に食べたいメニューを考えたとき、J児は「sushi」を選んだ理由について、「おいしいから I like さし身」と書いている。ところが、第3時、友達に伝え合う活動になると、料理が「ラーメン」から「cola」へ、「steak」が「salad」へと変化していた。ふりかえりでJ児は、第2時は「なぜ好きかというのを書けて良かったです。すごくおいしそうな食べ物が出ました。」と書いているのに対し、第3時

では「サラダの時にバランスが取れているからと英語で言えたので良かったです。」と書いている(資料6)。J児は友達と交流する中で、ただ単に自分の好きな食べ物を並べているだけではバランスが悪いと考えた。さらに、前時に考えた理由「おいしいから」だけではなく、他の理由「バ

ランスがとれているから」を伝えたいと思った。この伝えたいという「こだわり」が、新たな英語表現を学ぶ意欲を高めることにつながった。そしてJ児はALTに「バランスが良い」という英語表現をたずね、「It's balanced.」を知ることができた。このように、友達と交流しながら、新たな英語表現を伝えたいという「こだわり」があることで、子どもは自分の英語表現の幅を広げることができる。第3時のJ児のふりかえりからは、自分の「こだわり」が表現できたことで学ぶ楽しさを味わっていることがうかがえる。新しい英語表現と出会うことで、子どもは満足感をもって学習に臨むことができるとわかった。

一方、K児は「理由を言うのが楽しかったです。もっと単語量を増やし理由を言えるようにしたいです。」とふり返っている(資料7)。K児のワークシートは、「French fries カリカリだから」「Salad 野菜が好きだから」のように、料理名は英語で書かれている



資料7 K児のふりかえり

が、その理由については日本語で書かれていた。友達とメニューを交流するときに、理由を英語で話している友達の様子を見て、K児は「英語で表現したい」という思いを強めたのだと考えられる。「単語量をふやしたい」という思いは、交流の中で気付くことのできたK児の「こだわり」である。ふりかえりで、自分の成長や変容だけではなく、難しいと感じたことやできなかったことにも触れることで、自分の課題に気付くことができ、さらに次の学習へと意欲を高めることができるようになった。

授業の中で自分が気付いたこと、思ったこと、できるようになったこと、考えたことなどを自由に記述する部分をワークシートに設けることで、前時からの自己の変容や成長を、子ども自身が気付くことができるようになった。ふりかえりの自由記述を書くことで、子どもは自分の学びを見つめ直すことができる。さらに、「もっと～したい」という「こだわり」が生まれることがわかった。

今後に向けて

伝え合う必要性のある内容や場面の設定をすることで、子どもの「知りたい」「言いたい」という思いが生まれることがわかった。内容ではなく、特定の表現の指導をより重視したコミュニケーション活動には「知りたい」「言いたい」といった主体的にコミュニケーションする子どもの姿は見られない。内容を重視することで、コミュニケーションがより自然になり、真のコミュニケーションに近づくことができる。今後も内容を重視したコミュニケーションが生まれるような単元、授業をつくっていきたい。

1学期にはコミュニケーションの形態を工夫した活動ができなかったため、特定の友達とコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。よりたくさんの相手とコミュニケーションをとるためにも、形態には配慮する必要がある。フリーでインタビューする前にペアやグループでインタビューし合う、たくさんの人とコミュニケーションをとることが必要なタスクを設定する、などの工夫をしていきたい。

また、ふりかえりから、子どもの自分の成長への気付きや「もっと英語で話したい」という強い思いを感じることができた。一方、自由記述についての観点が明確でなかったことで「楽しかった」「選ばれてうれしかった」などの感想を書く子どもがたくさんいた。今後、観点を明確に示すことで、子どもがより自分の成長や課題を意識できるようにしていきたい。